

## BOOK REVIEW

宮沢賢治と植物の世界・宮沢賢治 農民の地学者  
宮城一男 高村毅一 著 築地書館

「ゲキウス・ロキ」という耳慣れない言葉をご存じでしょうか。英語におきかえると“Genius of Location”。土地の精霊、あるいは場所の精霊などと訳されています。

ある土地には、その土地を象づくっている地形の他にも、石、水流、植物、風といった土地を構成する要素、さらにその土地の経てきた歴史などといった様々なものが輻輳して積み重なっており、その精髓ともいべきものが、その土地の運命を担っています。「ゲニウス・ロキ」とは、ある土地を象づくり、活かしている「<sup>たましい</sup>霊」のことだ、ともいえるでしょう。

宮沢賢治は詩人、童話作家として知られていますが、彼の作品のどれにも色濃く感じられるのは、植物や、石や、風といった代弁者の口を通して語られるこのゲニウス・ロキの言葉ではないでしょうか。

賢治は農学者であり、地学者である、と説くこの二冊の本は、賢治のきいた土地の霊たましいの声をそのまま伝える土の匂いに満ちた本です。それは、これらの本を通してみる賢治の作品の背後に、いつも盛岡という確固とした、かけがえのない、濃密な土地が横たわって見えるからです。

「不思議だねえ。雲なんてどこから出て来るんだらう。ねえ、西のそらは青じろくて光ってよく晴れてるだらう。そして風がどどん空を吹いてるだらう。それだのにいつまでたっても雲がなくならないぢゃないか。」

「いや、あすこから雲が湧いてくるんだよ。そら、あすこに小さな小さな雲きれが出たらう。きっと大きくなるよ。」

「あゝほんたうにさうだね、大きくなったねえ。もう兎ぐらゐある。」

(童話「おきなぐさ」より)

こんな会話が聞こえてくるのも、賢治が小さなおきなぐさの口を通して、土地の霊の声を聞いていたからに違いありません。

そして、賢治の設計した花壇がいつも「幻想曲ファンタジー」的であるのも、そこに盛岡という土地の精髓が凝縮して込められているからだといえます。

「涙ぐむ眼」、「ドイツトウヒ」のある距型花壇、「エプロン型」花壇、「幻想曲ファンタジー」など、いずれも幾何学模様に納められた花壇ですが、それらの設計について記した「メモフローラ」というノートの記述の中には、いつも賢治の作品の中から発するのと同じ幻想的ファンタジックな匂いがたちこめているようです。

彼が自ら「イギリス海岸」と名づけた北上川畔を逍遙し、北上平野の広大さと、その経てきた地質学的な時間の大きさについて思いを馳せるとき、その森に棲むニンフ＝妖精や、その森を覆うニンバス＝光の雲は、そのまま花壇の図形の中に結晶したに違いありません。

農民の地学者、農民の植物学者としての賢治の生き方の中に、我々の目指す庭づくりの本質が、チラリと覗いたような気がします。